



Title	”人間喜劇”雑感
Author(s)	嶋田, 昇平
Citation	大阪外大英米研究. 1961, 2, p. 31-35
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/98929">https://hdl.handle.net/11094/98929</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## “人間喜劇” 雑感

嶋 田 昇 平

William Saroyan の“人間喜劇”は、貧しいマコーレー一家とそれを取りまく人々の愛情に支えられた生活の詩である。普通の小説のように、はっきりした性格をもった人物は登場しないし、はなばなしい筋もない。人間の善意や哀しき——人間が直面する悲しさを微笑をもってうけとめる心の豊かさ——が紙面ににじみ出ている。

とにかく、“人間喜劇”は、小説というよりはむしろ生活の詩であり、歌である。何げない日常の生活を描いた物語の中に、音楽がなんと豊富におりこまれていることか。電報配達人のホーマーが自転車で田舎道をはしる時、ペダルをふむリズムは自然に歌をさそい、その素朴な歌が彼の心の中では、一家中がそろって奏でるオーケストラとなり、今は兵隊にいつている兄マーカスがホーマーの心に思い出される。このようにホーマーは、夜働かねばならないような貧しい境遇にあって、決して歌や詩を忘れぬ少年である。又ホーマーは詩人であるのみならず、将来に大きな夢を抱く少年でもある。学校では居ねむりや、むだ口をたたく少年ではあるが、すなおで誠実であり、世界のあらゆる大都會を訪れること、作曲家になることを夢みる dreamer である。ホーマーのもつこのような一面は、やはりこの物語に詩をもたらし要素になっている。又、電報局長のスバングレーは、作曲家になりたいというホーマーに云っている。“That’s fine, and this is the place to start. Music all around you——real music——straight from the world——straight from the hearts of people. Hear those telegraph keys? Beautiful music.” 騒音以外の何物をも感じとらない世の常の大人となんと異っていることか。世の中のみにくさや、悪を見出すことはいともたやすい。実際世の中はみにくさでみちている

にも拘らず、美しいもののみを感じとったサロイアンはやはり詩人であることは疑えない。

この物語に詩をもたらししているもう一つの要素がある。それは「愛」であり、それがこの作品をよりうるおいのあるものにしている。アメリカ文学の中には、その伝統として Puritanism の精神を我々はしばしば認めるのであるが、サロイアンの作品には、清教徒的な厳格さは一かけらも見出すことはできない。町々で貧しい人々に説いたイエスの愛の精神が彼の作品を支えている。そしてそのような精神は、主に、マコーレー夫人が子供たちに聞かせる話の中に、豊富に見出すことができる。夫人は、缶詰工場に働く労働者にすぎないが、その人柄は、イエスの「徹底した愛」の精神に貫ぬかれているだけではなく、夫人の高い教養を感じさせる。例えば、幼いユリシーズの “Where is my father? If we wait, will he come home like Marcus too?” という質問に対して、夫人は説明をはじめ。“……every life shall one day end. That day came for your father two years ago. But as long as we are alive, as long as we are together……, nothing in the world can take him from us. His body can be taken, but not him.” このように夫人は、まだ幼い子供に対しても、死というむづかしい問題をまじめに説明している。肉体は消え去っても、その人は、残された者の愛の中に生きるということ、そういう意味から、よい人は決して死なない、永遠に愛の中にとどまるということ、つまり、「愛の永遠性」「永遠の生命」について説いているのである。又、実際、夫人は亡き夫のまぼろしをしばしばみる。あたかも生きているかの如く、お互に話しかけあったり、そして又、ユリシーズやホーマーの中にしばしば夫のおもかげを見出しているのである。

又、“Why is Homer working?” というユリシーズに、“because your brother Marcus is in the Army. Because we must have money with which to buy food and clothing and pay rent—and to give others whose need is greater than ours.” という夫人は、もうねむりかけているユ

リシーズに、なおも語りつづける。“You must remember always to give of everything you have. You must give foolishly even. You must be extravagant. You must give to all who come into your life……”これはまさしく「人に与えよ」と説いたイエスの教である。夫人は又、ホーマーにも云っている。“Try to understand. Try to love everyone you meet.”これは、“おのが目にある梁木をとりぞけ”とか“汝の仇を愛すべし”と教えたバイブルと通じるものである。

上述の如く、バイブルの精神が作品を支えていることは確かであるが、謹厳な雰囲気を我々は作品の中に感じることはできない。登場人物はすべて、悪の一面をもち合せない善人ばかりであり、a man of strict morals(謹厳な人)は一人も登場しない。「お互に人間同志だ」という共感が作品のうらづけになっている。例えば電報配達人として年若くして世間にほうり出されたホーマーに夫人は云っている。“It’s natural for fathers and mothers to be afraid of the world for their children but there’s nothing for them to be afraid of.”又、電報局長のスパングラーも亦、ホーマーに云っている。“Taking a telegram to China-town or out to the sticks is liable to scare a fellow——well, don’t let it scare you. People are people……”たとえ、黒い人であろうと、黄色い人であろうと、同じ人間ではないか、こわがることがあろうか、といった考え方がその他にも作品のあちこちにみられる。例えば、ユリシーズに手を振ってくれたニグロは、いつまでもユリシーズの心の中に記憶されているし、メキシコの婦人に息子の戦死を伝える電報を届けた時、ホーマーは、この婦人の悲しみをなくすることができるなら、この婦人の息子になってもよいときえ思っている。皮膚の色が何であっても、サロイヤンにとっては、“人間同志”なのである。又、コーチのバイフィールドがジョーに向って“You keep your dirty little wop mouth shut!”と叫んだとき、ホーマー、ヒックス先生、校長先生が、バイフィールドに対し憤りを示している。

そして又、ヒックス先生がジョーゼフに向って、“Joseph! you must allow

Mr. Byfield to apologize. He is not apologizing to you or to your country. He is apologizing to our own country. You must give him the privilege of once again trying to be an American.” といった時、校長先生がすぐに続けて云っている。“Yes, that’s so. This is America, and the only foreigners here are those who forget that this is America.” このように、サロイアンは、人種を超越してアメリカ人であるという強い自覚をもっている。相手が人間でさえあるならば、決して憎むことはできない。お互いを憎めば自分自身を憎むことになるというように、徹底した人間信頼の文学である。更に徹底して、人間にひそんでいる悪に気づかない人物が登場する。兎を盗まれて、盗まれたとっていない老人である。“I used to have a hutch of rabbits about eleven years ago, but somebody opened the door in the middle of the night and they all ran away.” 老人は決して盗まれたとは思っていない。“……I wouldn’t be surprised, if this whole city is full of wild rabbits now.” と云う。ホームーが、“I never see any of them.” と云えば、それに対して老人は、“Maybe not. But they’re here — somewhere. The whole city’s overrun with them, most likely. A couple more years and they’ll be a serious problem.” と云う。兎はまだまだどこかにいると信じている老人の、馬鹿とまで見える人のよさに我々は思わず笑を誘われる。このような「人のよさ」は、また、サロイアンの作品に見出されるユーモアに通じる。例えば、年令が二才不足で雇われたホームーと、二才年をとりすぎてまだ働いているグローガンとで、ちょうど釣合っているといったように、局長のスバングレーは、規則をユーモラスに解釈をするだけのゆとりをもっている。

以上、登場人物ははっきりした character はもたないけれども、その人柄 personality に我々は何ともいえぬ親しみをおぼえる。我々を惹きつけるものは、しみじみとした人生の味である。題名の The Human Comedy の Comedy は、人々のげらげら笑いを誘うような軽い低級な Comedy ではない。人生にみちあふれているあらゆる不幸、とりわけ我々から周囲の者を一人づつ連れ去

行く死のもたらす悲しさ，はかなさの満ちている世の中であって，悲しさを悲しさとしてうけとらず，死を生に，悲しみを喜びにすりかえてゆく術を心得た人々が演じる喜劇である。従って「人間喜劇」は喜劇的な一面のみを持つのではなく，人間がもつ悲哀の中に喜びと楽しさを見出し得る人々の姿でる物語である。